

Heidl György

*Érintés: Szó és kép a korai keresztény misztikában*

(ヘイドル・ジュルジ『触れること：

古代キリスト教神秘思想における言葉と像』)

Catena monográfiák 14, Budapest: Kairosz Kiadó, 2011, pp. 240,

ISBN 978-963-662-096-7, ISSN 1587-2599, A/5, 2500 Ft.

秋 山 学

本書は、評者が本誌において継続的に紹介を行っている「カテナ・シリーズ」のモノグラフ第14巻に相当し、ハンガリー語によるヘイドル氏の単著としては、評者の知る限り第三冊目である。氏の既刊著書には、同シリーズ第2巻『聖アウグスティヌスの回心』（2001年刊、本誌第48号拙稿「研究動向：ハンガリーにおける教父学研究」2006年を参照）、および論文集『キリスト教とセイレーン』（2005年刊）があり、これらの他に、氏はアウグスティヌスやオリゲネスの著作のハンガリー語訳注を、上掲諸書と同じくカイロス出版社から陸続と出版しておられる。本書は既発表の論文集ではあるが、精緻なアウグスティヌス研究から出発した氏が、美学的な感性を存分に発揮する一方、秘跡や典礼といった「教父哲学」という枠組みでは捉え難いテーマをめぐって積み重ねてきた思索を集成したものであり、その内容は哲学を超え、氏の神学的ヴィジョンを余すところなく示していると言ってよい。

著者のヘイドル氏は1967年生まれ、ハンガリー南西部の中核都市ペーチを拠点とするペーチ大学（JPTE：ヤヌス・パンノニウス学術大学）の美学講座主任を務める気鋭の教父学者である。2005年に第9回国際オリゲネス学会が同大学にて開催された際、同僚のショモシュ・ローベルト氏（氏の新刊書に関する拙評は本誌前号を参照されたい）とともに重責を果たし、大会の論文集は両氏の責任編集により既に公刊されている（*Origeniana Nona*, Peeters 2009）。またハンガリー教父学協会（MPT: Magyar Patrisztikai Társaság）にあって、ヘイドル氏は

創設後間もない頃から運営事務局の中心メンバーとして活躍し、現在ハンガリーを代表するラテン教父研究者の一人である。同時に氏は優れた作曲家でもあり、ギター奏者として自ら率いる2つの楽団のうち、古代キリスト教の讃歌をレパートリーとする四重奏団 Sator Quartet (2009年結成)のために、たとえば教皇グレゴリウス I 世 (540-604) の作とされる「至聖なる天の神よ」(Caeli Deus sanctissime) に曲を付している (www.satormusic.com を参照されたい)。このように多彩な活動を展開しつつ、教父学領域において、氏は実に該博な知識と透徹したテキスト解釈を披露する。本書は、このようなヘイドル氏によるグローバルな活動の最新の地平を知ることのできる好著である。

本書は全体として、序文および8つの章より成っている。本文の章題は、順に1「信仰」、2「われに触れるな」、3「律法、生命、糧」、4「テキスト、霊、芸術」、5「釈義、典礼、神秘思想」、6「キリストの神秘とエロースの神秘」、7「ミスタゴギアとミストロギア」、8「言葉、像、秘跡」であり、巻末に図版、原典一覧、参考文献、固有名詞索引が付されている。以下、各章の節題を紹介しながら本書の内容を概観することにしよう。

まず、全体の基調をなす第1章「信仰」には、「信と聖書」「プラトンと信」「蓋然性と信」「信の歴史性」「個人的な信」「触れることとしての信」「真理に触れること」「一者に触れること」といった題をもつ節が並ぶ。著者は、哲学と信仰とのつながりというものは、多くの点において近代また現代の哲学の概念とは異質であるにもかかわらず、矛盾を内包しないばかりでなく歴史的に裏付けられるものであるということを示す。この関連で「触れること」という概念が提起される。著者によれば、われわれは初期キリスト教の哲学者たちから、「信仰とは神の本性に触れることである」と考えることが実り多きものだとすることを学ぶ。キリスト教哲学にあって、「触れること」は、何人かのプラトン主義思想家においてそうであるように、神性の知的な接触を意味するというだけでなく、人間本性の感覚器官における接触をも意味するからである。

続く第2章「われに触れるな」は、章題からも明らかなように、『ヨハネによる福音書』第20章17節で復活のイエスがマグダラのマリアに語る言葉 *Noli me tangere* をめぐる考察である。著者は、ヒエロニムス、アンブロシウス、オリゲネス、アウグスティヌスによるこの句の解釈を順に提示し、四福音書全体におけるイエスの復活と昇天の記事を丹念かつ総合的に勘案しつつ、章末の「総括」

において自らの理解を詳細に記す。本書の題名である「触れること」は、もちろん本書全体の内容に関わるものではあるが、直接に「触れること」がテーマとなっている本第2章が本書の核を形成していることは言うまでもない。次の第3章「律法、生命、糧」には節区分がないが、『ヨハネ福音書』6:53「人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に生命はない」をめぐる解釈が展開される。この章にも教父文献からの引証が見られるものの（81頁）、本書の中ではもっとも「聖書学的」な章だと言える。著者によれば、キリスト教における入信の目的とは、個々の人間を、神との知的・肉体的な接触へと招き、人間と神の本性とが、混交と融解なく真に一体化するよう導くことである（11頁）。

第4章から第6章までは、おそらく本書のなかでも白眉と言える部分である。まず第4章「テキスト、霊、芸術」には「知的著作と芸術的著作」「三層の智慧」「『雅歌』と神秘哲学」といった節題が並ぶ。この章の出発点となっているのは、アンブロシウスによる『書簡』55であり、「われわれは文章を記す際、技芸に頼るのではなく、恩寵に依拠する。恩寵はあらゆる技芸に勝るからである」以下の一節である（84頁）。この書簡をめぐる解釈から出発しつつ、著者はアンブロシウスが「倫理・自然・観想」という古代哲学の3分説に基づきつつ、それをいかにキリスト教神学、すなわち聖書解釈学へと導入したかを実証する。著者によれば、アンブロシウスは真の秘儀導入者であり、神秘への手ほどきを行う司教であった。アンブロシウスについては、「哲学の世界からは遠い」と評されるケースがほとんどであるが、実は最も優れたキリスト教哲学者の一人である（11頁）。続いて第5章「釈義、典礼、神秘思想」は「イサクと霊について」「準備、進捗、完遂」「釈義」「典礼」「霊」といった節題を有するが、基調となっているのは、やはりアンブロシウスの『イサクと靈魂について』である。著者によれば、この作品は美学的な特質においてばかりでなく、アレゴリー解釈を通して展開されるその教説のゆえに、教父文献いなキリスト教霊性文献全般の中でも、卓越した位置を占めるべきものである（119頁）。著者はアンブロシウスから遡り、アンブロシウスがいかにオリゲネスに通暁していたかに関しても、オリゲネス『雅歌注解』の引用をもって実証的に解説する。そして第6章「キリストの神秘とエロースの神秘」は、「親縁性と類似性」「高挙もしくは上昇」「霊の庭」といった節の順に語られる。著者によれば、アンブロシウスはプロティノスを活用し、外見の類似性を維持しつつも、その背後において、キリスト教とプロティノス神秘主

義との相違点がどれほど大きいものであるかを認識させてくれるという。このことを実証する著者の筆さばきは圧巻である。

以上のアンブロシウス解釈を基盤に、著者は第7章「ミスタゴギアとミストロギア」において、若きアウグスティヌスがまだアンブロシウスの影響下にあった頃、どのように典礼や秘儀伝授の問題をテキストに表現しようとしたかを考察する。この章には節区分がないが、『再考録』1.6から出発し、『音楽論』あるいは『秩序論』といった初期著作のテキスト分析が行われる。そして終章「言葉、像、秘跡」には「秘跡・典礼共同体としての教会」「秘跡と像」「杖の奇跡」「十字架と十字架磔刑」「像と秘儀伝授」「洗礼」「聖体」「水を進らせるペトロ」といった、初期キリスト教の視覚芸術における秘跡の本質を鋭く示唆する諸テーマが語られ、美学芸術論であると同時に優れた秘跡論となっている。

本書により、われわれは何よりもまず、東西教父の結節点に立つアンブロシウスの偉大な姿に立ち会うことになる。アンブロシウスに関してわれわれは、ほとんど「アウグスティヌスにとっての教師」という視点からの評価しか与えて来なかった。しかし、特に旧約聖書の諸シンボルに対するアンブロシウスの理解は、オリゲネスやバシレイオスといったギリシア教父たちの源泉に汲んだ極めて豊かなものであり、聖書解釈から秘跡論へと深化する性格を持つ。アウグスティヌスが感銘を受けたのも、そのように無限の拡がりを見せる師の神学的ヴィジョンであっただろう。著者は序文において、本書を導く2人の師はアンブロシウスと使徒ヨハネであると記しているが（12-13頁）、評者の見る限り、著者の本領はアンブロシウス論に関して特に秀逸なかたちで発揮されている。アンブロシウスがこれほどまでに神秘家でありまた秘儀への導入者であるということは、少なくとも日本の教父学界的なかでは未知の事柄であろう。巻末の参考文献表に挙がる約110点の文献のうち、主としてアンブロシウスに関係するものだけでも約40点にのぼる。われわれが新たにこの方面での神学的思索を深めようとする際、本書は格好の導き手となるだろう。

われわれは確かに、聖書には「触れる」ことの重要性が繰り返し語られているということに気づかされる。「われに触れるな」や「汝の手を伸ばし、わたしの脇腹に入れよ」（ヨハネ20:27）ばかりでなく、著者の慧眼によれば、このテーマにはモーセによる「メリバの水」（民数20）の奇跡なども含まれる。中世哲学が啓く新しい局面を見事に描き出した力作として、本書を高く評価したい。